

羅馬法沿革史/渋谷慥爾(講義) ; 畔上啓策(編輯)  
(英吉利法律講義録(1886(明治 19)年度 第 1 年級))

このPDF ファイルは、英吉利法律講義録(1886(明治 19)年度 第 1 年級)(原裝本デジタル・データ)から、羅馬法沿革史の部分を抽出して編集したものである。

2015 年 7 月 中央大学大学史資料課

羅馬法沿革史之部

法學士 澁谷慥爾 講義

校友 畔上啓策 編輯

緒論

第一節 緒論ノ主旨

緒論ノ主旨

Justinian.

ジヤスチニアン帝ノ法制ハ羅馬法沿革史ノ中最モ末世ニ屬スルモノニシテ是ヨリ前數百年ノ間羅馬法ハ其邦國ト均シク幾多ノ變遷ヲ經過シ來リタルヲ以テジヤスチニアン帝ノ法典ハ此數世間ニ於テ漸次發達シタル法律ノ主義及ヒ思想ヲ含蓄スルモノニシテ其法律ノ淵源ハ遠ク羅馬創世ト共ニ發シ星霜ヲ經ルニ從テ次第ニ發達變更シ終ニ成熟シタルモノナレハ此法典ヲ學ハント欲スルニハ先ツ羅馬法沿革ノ大要ヲ知ラサル可カラス之ヲ知ラスシテ其意ヲ達セントスルハ恰モ西帝

羅馬法沿革史

國及ヒ共和政體ノ歴史ヲ學スシテ東帝國ノ歴史ヲ理會セントスルト  
 一般ニシテ到底其目的ヲ遂クル能ハサルナリ且又此法典中ニ記載ス  
 ル羅馬法ノ綱領ニ至リテハ英吉利學者ノ見馴レサル所ナレハ假令諸  
 君ハ此法典ニ就キ直チニ習得スルヲ得ヘシト雖トモ初學ノ輩ノ爲メ  
 ニ其細目ヲ修メントスルニ先チ法律各部ノ要領ヲ概論スルハ蓋シ無  
 益ノ勞ニアラサル可シ是ヲ以テ此緒論ニ於テ初メニ羅馬法ノ沿革史  
 チ畧序シ然ル後羅馬私法ノ大意ヲ説カント欲スルナリ然レトモ是等  
 ハ唯此法典ノ序言トスルニ止マレハ固ヨリ大概ヲ論スルニ過キサル  
 ナリ

第二節 羅馬古代史並ニ貴族ボビユラス

羅馬古代ノ歴史ハ漠トシテ甚タ明ラカナラスト雖トモ其市民ハ太古  
 ヨリシテ貴族及ヒ平民ノ二種ヲ以テ組織ス而シテ元來此貴族ナル者

獨リ政治ノ全權ヲ掌握シ相互ニ特別ナル宗教上ノ羈絆ニ由テ連結セ  
シコトハ疑フ可カラサル所ナリ加之貴族政治ノ全體組織ニ於ケルモ  
亦等シク疑フ可キ理由アルヲ見ス其政體ノ因リテ來タル原由ノ如何  
ハ暫ク之ヲ措キ抑彼貴族ナルモノハ三種族ヨリ成立スルモノニシテ  
各種族分レテ十「キウリー」トナリ各「キウリー」ハ又分レテ十「デキウリー」  
亦「ゼンス」トナル而シテ各「デキウリー」ハ同一ノ名稱ヲ有シ同一ノ神聖  
ナル典式ニ依テ結合シタル夥多ノ家族ヲ抱括スルモノナリ然リ而シ  
テ其實際ハ一個人或ハ一家族カ時アリテ他族ヨリ宗族中ニ混入スル  
モノアリシト雖モ同宗族ノ各人ハ同一ノ祖宗ヨリ降誕シ而シテ同宗  
族ノ各家族ハ同一ノ祖先系統ノ分派タルコトハ蓋シ道理上然ラサル  
ヲ得ス故ニ家族ノ人々ハ各正統ノ血族タルコトヲ主張シ從テ同種族  
ノ各自ハ皆理論上同等一様ノ權利ヲ有セシナリ

宗教上ノ  
組織

右ノ如キ數宗族中ノ各家族ノ首長ハ「キウリス」ノ議會會即チ同宗共姓人  
民ノ總會ト稱スル大議會ニ集合シテ政務ヲ議シタリ而シテ又右三種  
族中各宗族ノ數ニ應シ三百名ノ議員ヲ以テ組成スル一議會ヲ設ケ之  
ヲ元老院ト號シ委スルニ大議會ニ附シタル重大ノ問題ニ就テ之ヲ説  
明スルノ任ヲ以テシ國王ノ如キハ此元老院ノ指名ニヨリ「キウリス」ノ  
選舉スル所ニシテ議會全體ノ首坐ニ位シ施政ノ萬機ヲ總括スルノ任  
ヲ有セリ

第三節 宗教上ノ組織

前節ニ述ヘタル如ク貴族ナルモノハ強大ナル宗教ノ羈絆ニヨリテ連  
結セラレタルモノナリ元來羅馬ノ宗教ハ政治ト密接ノ關係ヲ有シタ  
ルモノナレハ宗教ノ首領ハ僧侶社會ニアラスシテ市民ナレハ敢テ世  
俗ト異ナル所アルニアラス唯其異ナル所以ハ殊別ノ神聖ナル職務ヲ

以テ之ニ委スルノ一事アルノミ故ニ國王ハ宗教一體ノ首領トナリ陰陽士及ヒ宗教上ノ儀式ヲ處理スル所ノ官吏アリテ之ニ隸屬セリ貴族全體ハ羅馬國宗教上組織中ノ一ニ居ルモノナリ故ニ「ゼンス」家族ノ中ニ於テ單ニ生誕シタルトノ事實ノミヲ以テ他種族ノ入ルヲ許サル此神聖界裡ニ入ルコトヲ得セシメタリ而シテ此境裡ニ在ルモノハ生レテ胎内ヲ出ツルヨリ身黃泉ノ客トナルマテ宗教ノ儀典ニ圍繞セラレ終身重要ノ行爲ハ一トシテ嚴正ノ式ニヨリ制裁ヲ受ケサルモノナク地方各區分ヲ異ニスルニ從ヒ又各其殊別ノ儀式ヲ異ニシ一家及ヒ「ゼンス」ニ至ルマテ皆各尊信スル神明ノ擁護ヲ蒙ムラサルモノナク又各居住スル地方ニモ亦歸依尊信スル所ノ神アリテ以テ之ヲ鎮守ス而シテ年曆ノ制定ハ宗教ノ司ル所ニシテ就業及ヒ休憩ノ時ヲ規定スルモ亦神意ノ好ム所トセリ且神明ハ常ニ邦國ノ議會ヲ守護

シテ其企圖スル所ノ萬機神慮ニ協ヒタルヤ否ヤハ徵候アリテ以テ之ヲ知ルヲ得蓋シ其之ヲ察スルモノハ獨リ聖賢ノ能クスル所トセリ

第四節

平民 ブルジョア

斯ノ如キ特權ヲ附與セラレタル一團結ノ外羅馬國中又他ノ一原素アリ之ヲ平民ト云フ而シテ其位地ハ彼特權ヲ有スル貴族ノ占ムルモノト大ニ異ナル所アリ蓋シ此平民ナルモノハ元ト降服シタル市民ノ羅馬ニ引致セラレタルモノ或ハ自ラ好テ羅馬ニ移住セシモノ或ハ自由ヲ得タル奴隸等ヨリ組織シタルモノナラン而シテ平民ハ國王又ハ貴族ニ屬從スルモノニ他邦人ト共ニ「ゼンス」社會ノ政治範圍外ニ置カレタリ故ニ平民ハ「ゼンス」ニ入り議會ニ出テ立法又ハ行政ノ事ニ參カル能ハス宗教法ニ於テモ亦然リ之レヲ要スルニ平民ハ主治者ニ固有ノ公法及ヒ特有ノ神授法ヲ奉スル能ハサリシナリ「サルヴキアン」憲法

及ヒ三十地方種族ノ設アリシハ現存制度ノ因テ起ル所ノ基ヲ變シタルモノトセンヨリハ寧ロ將來變革ノ基ヲ開キタルモノト云フ可シ區郡議會ハ平民ノ始メテ政權ニ入ルノ門ヲ開キタルモノナリ抑區郡議會ナルモノハ所有財産ノ定度ニ從ヒ其貴族ト平民トヲ論セス之ニ會合スルヲ得ルモノナリ而シテ此三十種族ノ憲法ハ既ニ都邑ノ人民ヲ小區域ニ細別シタルヲ以テ若シ此各種族ニシテ共和政體時代ノ始メニ於テ「トリビュン」ノ制度以前ニ公認セラレタル一議會ヲ有セシナランニハ其議會ニ於テハ平民ノ最大ノ權力ヲ有セシヤ素ヨリ疑フ可カラサルナリ然レモ假令區郡議會ハ終ニ「キウリア」議會ヨリ殆ト政權ヲ取去リシト雖モ猶ホ政治體即チ貴族各自間ニ於ケル從來ノ關係ハ存在シタルノミナラス理論上長ク毀傷セラレサリシナリ又「キウリス」ハ獨リ區郡議會ノ議決ニ効力ヲ有セシムルニ欠ク可カラサル宗



教上ノ制裁ヲ附與スルノ特權アルモノナリ且平民ト貴族ハ殆ト同一ノ私法ニヨリテ支配セラル、ト雖モ平民ハ依然舊ノ如ク宗教特權ノ障壁ニ隔離セラレ未タ貴族社會ニ入ルコトヲ得サリシナリ

### 第五節 羅馬古代ノ法制

羅馬早世ノ如キ社會ニ於テハ一時偶然ニ顯ハル、所ノ事件ヲ規定スルノ外ハ殆ド直接ノ法律制度アラサリシナリ其法律ヲ制定スルニ當リテハ如何ナル法律ト雖モ皆元老院長即チ國王ノ指揮ニ屬スル處ノ元老院ニ於テ始メテ發議修正議決セラレ然ル後最高權ヲ有スル所ノ「キウリアタ」議會ニ附スルモノトセリ然ルニ區郡議會ノ制度ヲ設ケテヨリ「キウリー」議會ノ政權漸ク區郡議會ニ歸シ遂ニ「キウリー」ハ唯區郡議會ノ決議ニ宗教上ノ制裁ヲ與ヘンカ爲メニ集會スルニ過キササルニ至レリ又國王ハ宗教總裁ノ資格ヲ以テ獨リ其權内ニアル所ノ事件ニ

裁判官

關スル規則ヲ設ケタリ蓋シ此レ宗教規則レノ類集ハ宗教儀典ノ行爲ヲ規定スルノ規則タルニ過キサルモノニシテタークキニアス、スーパルハスト同時ナルパーピリアスニ依テ編纂セラレタルナラン

第六節 裁判官

凡ソ訴訟事件ニ就テ國王ハ高最等ノ判官タリ然レモ刑事事々件ニ於テハ若シ被告人貴族ナルルハ國王ノ決裁ニ對シキユリアレ議會ニ控訴スルヲ得タリ若シ又被告人平民ナルトキハ控訴スルノ法衙アラサリシト雖モ國王追放ノ後幾何モナクシテレワレリアンレ法令ニヨリ區郡議會ニ控訴スルヲ許シタルヲ以テ平民ハ之ニ控訴スルヲ得タリ民事々件ハ國王自ラホ宗教總裁キノ資格ヲ以テ之ヲ裁決シ或ハ國王ニ隸屬スル副總裁ボンテヒスレ之ヲ裁判セリコレ全ク貴族ノ私法ハ悉ク宗教法ト混合セシヲ以テ之ヲ會得シ且監督スルハ宗教總裁ノ義務ナレハナリ

國王  
裁平  
員

國王追放  
後平民ノ  
地位

第七節 國王追放後平民ノ地位

國王追放ノ後平民ハ「キウリア」議會并ニ元老院ニ列スルコトヲ許サレタルノミナラス實際上極メテ狹隘ナル制限内ニ於テ自家ノ「ゼンス」ヲ組成スルコトヲ得タリ然レトモ從來ノ敵意尙存シ貴族平民間ノ軋轢ハ愈々其激烈ヲ加ヘタリ然ルニ「ヴァレリアン」法令ニ依リ府民若シ死刑ヲ宣告セラレタル場合ニハ區郡議會ニ上告スルノ權利ヲ定メタルノミナラス建都二百六十年ニ於テ「アエンタイン」退去事件ハ貴族ニ迫リ現存スル負債ヲ償却スルノ義務ヲ消滅シ且平民ノ權利ヲ保護センカ爲メ「トリビウン」官ヲ設クルニ至レリ而シテ此「トリビウン」ナル官ハ其始メハ二人ヨリ成立セシカ其後五人トナリ終ニ十人ニ増加スルニ至レリ邦國下等社會ノ代表者タル此等ノ「トリビウン」官ハ「トリビウン」議會ニ最モ緊要ニシテ

十

且新鮮ナル性質ヲ與ヘタリ或ハ寧ロ此議會設立ノ權輿ナリト云ハン  
モ恐ラクハ敢テ不可ナルナカル可シ而シテ當時此議會ハ司法官ヲ撰  
舉スルノ任ヲ有セシモノニシテ其司法官ハ特ニ平民社會ノ利益ヲ保  
護スルコトヲ委任セラレタリ此ノ如ク平民ハ稍々權力ヲ得タリト雖  
モ猶單ニ一部ノ救濟ヲ以テ治療スヘカラサル弊害ヲ脱却スルコトヲ  
勉メサル可カラス何トナレハ則チ平民ハ他ノ傷害スル所トナルモ未  
タ之ヲ訴フルノ法庭アラサレハナリ元來司法ノ全權ハ貴族ノ掌中ニ  
在リテ死生ニ關スル場合ニ於ケルカ或ハ故意惡念ヲ以テ法律ヲ誤用  
スルニ因テ蒙ラシメタル傷害ノ彼ノ署名ナル「ワルジニア」ノ先例ニ於  
ケルカ如ク被害者ヲシテ救濟ヲ腕力ニ訴ヘシムルニ足ルヘキ極度ニ達  
スルニアラサレハ司法官ノ裁決ニ對シテ控訴ヲナスヲ得サリシナリ  
故ニ平民ハ貴族ト同一ノ私法ヲ有スルヲ以テ理論上平民ニ屬スル所

ノ權利ノ多分ハ實際上決シテ享有スルヲ得サリシナリ然レトモ革命  
 一タヒ起リテ政體ヲ變更スルノ機會ヲ平民ニ與ヘタリ蓋シ此政體ノ  
 變更タル其性質平民社會ノ爲メニ政權ニ參與スルノ端緒ヲ開キ且永  
 遠確定ノ法律ヲ制定スルノ機關ヲ供給セシモノナリ  
 羅馬建都三百三年ニ於テ貴族平民各同數ノ人員ヨリ組織スル所ノ十  
 人政治ト稱スル一政權ヲ置キ以テ各司法官ヲ此一體中ニ集合シ之レ  
 ニ委スルニ各種ノ政柄ヲ以テスルニ至レリ蓋シ十人政治ナルモノハ  
 習慣法ヲシテ公正至當ノ管理ヲ得セシノンカ爲メニ其法律ヲ確乎不  
 援ノ地位ニ置キ且市民全體ノ利益ノ爲メ之ヲ公布スルニ最モ緊要ナ  
 ル總テノ部分ヲ蒐集編纂シ之ヲ成文律トナサントスルノ目的ヲ以テ  
 設ケタルモノナリ

第八節 十二銅表

羅馬後世ノ記者十二銅表ノ法律ヲ稱揚スルノ過度ナルト希臘ノ法律  
ヲ學ハシメンカ爲メニ羅馬ヨリ委員ヲ該國ニ派遣シタル說話トノニ  
者ハ此銅表ノ實際表示スル所ノモノト大ニ實體ヲ異ニスル法律ノ思  
想ヲ吾人ニ與ヘタルモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ吾人ハ「ゴール  
人種ノ侵入スル以前ニ存在シタルカ如キ羅馬公法及ヒ私法ノ整然ト  
シテ大ニ見ルヘキモノアラントナ豫期シ又法律ノ全體ハ多少外國  
法律元素ノ餘臭ヲ免ル能ハサルヘキヲ期シタリ而シテ又シセローノ  
曾テ人智ノ殆ント完全ナルモノト思考セシ法制ニ於テ新奇ナルモノ  
アラント思考スルハ又自然ノ勢ナリ然ルニ今日吾人ノ手ニ殘ル十二  
銅表ノ遺片ヲ見ルニ及ヒテ吾人ノ此銅表ニ就テ抱キタル觀念ノ全ク  
虚空ニ屬スルコトヲ證明セリ是此銅表ノ中吾人ハ未タ他國ノ元素ヲ  
借り來タリシト斷言シ得ヘキモノアルヲ見ス唯僅ニ葬儀ノ法律ニ關

スル二三ノ規則ハソローロンノ法律ヲ取捨セシニ過キサレハナリ而シテ此等銅表ノ包含スルモノ多クハ日常處世ノ行狀ヲ規定センカ爲メニ豫メ法律トシテ確定シ之ヲ公布スルノ止ムヘカラサル諸點ヲ單簡ニ發布シタルモノナリ是ヨリ以前法律ハ固ヨリ存在シタルモ邈漠浮泛口碑ノ形狀ニシテ唯僅々數箇ノ法律ヲ上梓シ之ヲ公然明示シタルニ過キサリシナリ十二銅表ハ是等ノ法律主義ノ適用及ヒ説明ヲ司法官ノ裁決ト法律ニ老練シタル輩ノ解釋トニ委任シクルカ故ニ此等ノ諸人モ亦習慣法ノ多分ヲ全ク不問ニ附シタリ然レトモ時勢ノ必要ニシテ裁決ヲ要スルモノハ悉ク之ヲ裁決シタリ此ヲ以テ此ノ輩ハ私法ノ結構ヲ末世ニ對シテ安置スルノ確乎タル基礎ヲ建設シタルモノナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ古人此法律ヲ稱シテ新規ナル法制ノ創造トナシタル如ク此法律ハ府民ノ多數ヲ裨益シタル蓋シ尠少ニアラサリシ

ナ理會スルコト敢テ難キコアラサルヘシ  
以下掲クル所ノモノハ即チ今日世ニ知ラル、十二銅表ノ重要ナル規  
則ナリ

第一表ハ民事詞訟ノ手續ニ關スルモノニシテ若シ人司法官ノ召喚ニ  
應シ出庭セサルトキハ威力ヲ以テ之ヲ引致シタリト雖モ老衰疾病者  
ノ爲メニハ特ニ牛馬ヲ供シタリ又原被兩造互ニ和議承諾スルトキハ  
之ヲ和解スルコトヲ許容シタリ若シ然ラサルトキハ法庭ニ於テ午前  
ハ原被兩造ノ陳述ヲ聽キ午後ニ至リ司法官ハ之ヲ判決シ日没ニ至リ  
テ其手續ヲ中止セリ  
第二表ハ詞訟ニ於テ宣誓者宣誓者トハ無罪或ハ負債ナノ出スヘキ保  
キコトヲ宣誓スル者ヲ云フ證金ノ額ヲ定メ又必要ノ場合就中司法官ノ命シタル判官又ハ審問官  
ニシテ其人ヲ得サルカ如キ場合ニハ其事件ヲ中止シ得ヘキコトヲ許



シ且證據人ヲ召喚スルノ方法如何ヲ指定スルモノナリ  
 第三表ハ負債者ノ爲メニ設ケタルモノナルヤ明カナリ何トナレハ此  
 法律ハ結局負債主ヲ以テ債主ノ爲ス所ニ一任シタリト雖モ又負債主  
 ニ其運命ヲ挽回スルノ手段ヲ附與シタレハナリ蓋シ負債主ハ其負債  
 アルコトヲ自白スルカ又ハ負債者ナリト判定セラレタル場合ニ於テ  
 三十日間ノ猶豫ヲ與ヘラル、モノニシテ其間ハ債主ヨリ負債主ニ對  
 シ起訴其他ノ手續ヲナスコトヲ得ス其期ヲ經過シタル後司法官ニ之  
 チ訴フルモノトシ若シ負債主尙ホ其負債ヲ辨償セサルカ又ハ保證人  
 ナ見出サ、ル昨ハ債主ハ量目十五磅ヨリ多カラサル鐵鎖ヲ負債主ニ  
 負荷セシムルコトヲ得ヘシ然レトモ毎日一磅ノ麵粉ヲ給セサル可カ  
 ラス斯ノ如クシテ六十日間經過スルトキハ之ヲ司法官ノ前ニ出シテ  
 其生存セルヤ否ヤヲ示スモノトセリ而シテ又債主ハ其負債ノ金額ヲ

三日間市場ニ揭示スルモノトセリ是負債主ヲ購フノ機會ヲ與ヘタル  
モノニテ右ノ手續ヲ經タル後ニ非ラサレハ債主ハ其負債主ヲ自家ノ  
欲スル所ニ從ヒ奴隸トナシ之ヲタイバル河以外ニ賣却スルヲ得ス又  
之ヲ殺スコトヲ得サリシナリ若シ又數人ノ債主アルトキハ各債主ハ  
其負債主ヲ片裂シテ其身面ヲ債主間ニ分ツヲ得假令債主ノ一人其取  
ル可キ權利ニ比例シ多分ニ其身體ノ一部ヲ取ルコトアルモ之ヲ罰セ  
サリシナリ

第四表ハ一家族ノ家長ニ關スル法律ニシテ家長タル者ハ其權内ニ屬  
スル不具ノ子女ヲ殘殺スルモノトシ且其子女ノ生命自由ノ上ニ有ス  
ヘキ無上ノ專權ヲ定メタリ然レトモ家長若シ三タヒ其子ヲ賣却シタ  
ルトキハ子ノ家長ノ束縛ヲ免ル可キモノトセリ

第五表ハ相續及ヒ後見ニ係ルモノナリ凡テ婦人ハ清淨ノ處女ヲ除ク

ノ外終身後見ノ職ヲ有スルモノトシ若シ人遺囑書ニ由リ其相續ヲ定メタルトキハ法律ハ之ニ從ヒ若シ遺囑ナクシテ死亡シ正統相續者ナキ場合ニハ其人ニ最近ナル正系ノ親戚ヲ以テ相續人トナシ又正系ノ親戚ナキ場合ニハ同系ノ者ヲ以テ之ニ充ツルモノト定メタリ且又遺囑書ニ後見人ヲ指名セサル時ニ於テハ正系ノ親戚ハ後見人トナリテ瘋癲白癡等ノ管財者ヲ有セサル者ヲ保護スヘキモノト定メタリ第六表ハ所有權ニ關シテ左ノ事項ヲ定メタリ凡ソ「ネキシアム」或ハ「マシヒアム」ト稱スル嚴格ナル不動産移轉ノ方式ニ於テ陳述シタル言語ハ法律上其効力ヲ有スルモノニシテ之ニ違背スル者ハ其不動産ノ代價ニ二倍スル科料ヲ拂フヘキモノトセリ

期滿得權ヲ得ルニハ不動産ハ二箇年動産ハ一ケ年ノ間之ヲ所持スルコトヲ必要トス又夫ハ其妻ノ期滿得權ヲ得ルニ一ケ年ヲ以テ足レリ

トセリ然レトモ其妻ニシテ若シ其期限内ニ引續キ三晝夜間夫ノ居住  
ヲ離ル、ニ於テハ其効力ヲ生セサルナリ而シテ羅馬府民ノ外何人ト  
雖モ此期滿得權ヲ得ルコト能ハサルモノト爲シタリ又既ニ家屋ニ建  
築シタル材料ハ其家屋ノ破壊セラレ、カ或ハ額敗スルニ至ルマテハ  
其材料ノ所有主ハ之カ返濟ヲ請求スルヲ得サルモノトセリ且又賣却  
シタル物件ノ所有權ハ賣主ニ於テ全ク代價ヲ拂ハル、マテ買主ニ移  
轉セサルモノトシ尙ホ法律上ノ移轉ト稱スル財産移轉ニ關スル想像  
上ノ詞訟及ヒ「マンシペーシヨン」ノ手續ヲ確定シタリ  
第七表ハ建築物土地道路ノ廣狹樹木ノ繁茂シテ他ノ領地ヲ犯シタル  
場合等ニ關スル規則ヲ含有スルモノニシテ疆界爭論ノ場合ニ於テハ  
司法官ハ審査人ヲ命シテ之ヲ審判セシムルモノトセリ  
第八表ハ犯罪規則ニシテ誹譏ノ詩歌ヲ賦シ又ハ暴行ヲナシタルモノ

ハ重罪ノ刑ニ處シタリ而シテ四肢ヲ折斷スルノ罪ハ之ヲ罰スルニ四  
 肢折斷ノ刑ヲ以テセリ又自由人ノ一片ノ骨ヲ毀損スルモノハ三百<sup>ア</sup>  
 セス<sup>ア</sup>貨幣ノ名稱ナリ<sup>ハ</sup>羅馬國ノ罰金ヲ科シ奴隸ノ一片ノ骨ヲ毀損スルモノハ  
 百五十<sup>ア</sup>アセス<sup>ア</sup>ノ科金ニ處シ他人ニ損害ヲ加ヘ又ハ瑣細ノ暴行ヲナシ  
 ダルモノハ二十五<sup>ア</sup>アセス<sup>ア</sup>ヲ科シタリ若シ四足獸ノ爲メニ損害ヲ蒙フ  
 ルトキハ被害者ノ何人タルニ拘ハラズ損害要償トシテ其獸類ヲ被害  
 者ニ與フルモノトナシ夜中他人ノ田畑ヲ損害シ或ハ建築物ニ放火ス  
 ルモノハ死刑ニ處シ竊盜ノ場合ニ於テ若シ其目的ヲ遂ケスシテ捕縛  
 セラルトキハ其罪ヲ輕減スルコトナク均シク竊盜ノ罪ヲ以テ論ス  
 ヘキモノトス若シ自由人竊盜ヲナストキハ笞杖ヲ加ヘ然ル後被害者  
 ニ之ヲ引渡シ若シ又奴隸竊盜ヲ犯シタルトキハ笞杖ヲ加ヘタル後<sup>ダ</sup>  
 ルピア<sup>ン</sup>岩上ヨリ投棄スルモノト爲セリ其他重大ナラサル竊盜犯ニ

關シテハ少類ノ科金ヲ課スル所ノ種々ノ規則ヲ設ケタリ又金錢貸借ノ利子ヲ一箇月百分ノ一ト定メ是ヨリ以上ノ利ヲ貪ルモノニ其現金四倍ノ罰金ヲ課スルモノトセリ且又詐僞ヲ用ヒテ證人トナルモノハタルビアン岩上ヨリ投棄シ正當ノ方式ニ於テ證人若シ其舉證ヲ肯セサルキハ之ヲ不名譽罪ト稱シ魔術者及ヒ毒殺者ハ重罪ノ刑ニ處スルモノトセリ

第九表ハ公法ニ關スル規則ヲ定メタルモノニシテ一ノ特典則チ一個人ニ關係スル法律ニアラサルナリ郡會ハ獨リ重罪ノ刑ヲ宣告シ得ルモノニシテ判官或ハ仲裁者ノ賄賂ヲ取ルモノハ重罪ノ刑ニ處ス可キモノトシ而シテ各刑罪宣告ニ對シテ人民ハ上告スルヲ得ルモノトシ敵人ト同盟シ或ハ敵人ニ府民ヲ引渡シタルモノハ死刑ニ處スルモノトセリ

第十表ハ葬式ニ關スルモノニシテ其儀式及ヒ虚飾ヲ制限スルノ規則ナリ

第十一表ハ貴族ト平民ノ婚姻ヲ禁スルモノナリ

第十二表ハ雜則ヲ規定スルモノニシテ譬ヘハ他人ニ傷害ヲ加ヘタル奴隸ハ其賠償トシテ之ヲ被害者ニ交付スルモノトシ又無益ノ目的ニ供スル爲メニ貸借ノ契約ヲナシタルトキ或ハ仕拂ヲ受クヘキ金圓ニシテ無益ノ目的ニ消費セラル、トキハ負債者ニ属スルモノハ其何物タルヲ問ハス之ヲ取押フルコトヲ許可シタル等ノ如シ且此十二銅表ハ四種ノ訴訟法ヲ公認シタル其訴訟法ノ性質ノ如キハ此緒論ノ末尾ニ於テ之ヲ論スルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セス今四種ノ訴訟法ヲ擧クレハ則チ<sup>い</sup>サクラメンタム「<sup>イ</sup>ギエーデシス、ボスチユラシヨ」<sup>イ</sup>疆堺裁定ノ審査ニ用ユル方式「<sup>イ</sup>マナス、インギエクシヨ」及

平民政治  
上同等ノ  
位置ニ達  
スルコト

ヒ「ビグノリスカピチ」負債主ノ物品取押ノ方法はナリ尙又此銅表ハ  
施政官ト裁判官トノ區別ヲ公認シタル者ニシテ是蓋シ羅馬訴訟手續  
ノ著シキ顯狀ナリ而シテ以上數種ノ訴訟法ト此施政官ト裁判官トノ  
區別ハ恐クハ十二表ノ時ヨリ以前已業ニ存在シタル者ナルヘシ又此  
銅表中ニ於テ羅馬固有法ノ著明ナル點ヲ發見スルヲ得ヘシ即チ家長  
權、期滿得權、後見職、遺囑并ニ無遺囑相續「チキシアム、マンシベシヨ」ノ如  
キ皆其効力ヲ有スルモノニシテ羅馬古代習慣法ノ一部ヲナシタルヤ  
明瞭ナリ

### 第九節 平民政治上同等ノ位置ニ達スルコト

十人政治ハ元ト貴族平民間ニ存在セル政治上ノ區別ヲ當時ニ於テ成  
シ遂ケ得ヘシト信シタル丈ケ脱却スルノ手段トシテ設ケラレタルモ  
ノナリト雖モ實際ヲ顧ミレハ殆ント其目的ヲ達スルコト能ハサリシ



ニ驚カサルヲ得ス何トナレハ十人政治ノ半數ハ平民ヲ以テ之ニ充ツ  
ルト雖モ「キユリア」議會集會ノ廢止及ヒ「トリビウン」官ノ消滅ハ僅ニ  
之ヲ償フニ司法官ヲ以テセリト雖モ元來司法官ナルモノハ常ニ貴族  
ト相結合シ唯々トシテ其隨使スル所トナリシヲ以テ實際平民ノ利益  
ヲ保護スルニ足ラサリシナリ加之十人政治第二世ノ時ニ至リ新ニ二  
表ヲ増加セリ而シテ後世ノ學者ハ其表中記載スル所ノ規則ヲ論シテ  
甚ダ不正ナルモノトセシカ就中平民ニ通婚權ヲ與フルコトヲ禁シタ  
ルカ如キハ吾人モ亦取ラサル所ナリ  
抑モ十二銅表ハ法律ヲ確定頒布セシヲ以テ平民ニ強大ナル勢力ヲ與  
ユルノ根源タリシノミナラス將來貴族トノ競争ニ於テモ亦平民ヲシ  
テ鞏固ナル位地ヲ保持スルヲ得セシメタリト雖モ彼ノ十人政治ナ  
ルモノハ實ニ平民ニ取テ不利ヲ與ヘタル者ニシテ平民政治上ノ歴史

Lex Caniuleia.

Lex

Horatius  
Valerius.

中一大危厄ト言ハサルヲ得ス況ンヤ「アピアスクローギアス」及ヒ其  
 同類即チ十人政治ノ一タヒ滅亡ニ歸スルヤ否ヤ平民ノ著シキ進歩ヲ  
 現ハシタル事實ヲ以テ之ヲ見ルモ又其不利ナリシヲ證明シ得ヘキコ  
 於テチヤ  
 「ホラシアス」及ヒ「ワレリアス」ノ法令出ツルニ及ヒテ獨リ司法官ノ裁決  
 ニ對シ上告ヲ爲スヲ得サル所ノ憲法ヲ廢止シタルノミナラス猶ホ「ト  
 リビウン」議會ノ命令ト雖モ元老院并ニ「キユリ」議會ノ二者之ヲ認可  
 スルニ於テハ羅馬全府民ニ對シ効力ヲ有セシムルコトヲ規定シタリ  
 而シテ羅馬建都三百九年即チ十人政治廢絶ノ後僅ニ四年ヲ經テ「カニ  
 ウレアン」法令ハ平民ニ通婚權ヲ與ヘ是ニ於テ乎初メテ平民貴族間ノ  
 婚姻ハ法律ノ禁セサル所トナレリ  
 此變革ハ實ニ各個人ヲ抑壓シ且私交上ノ關係ヲ紊亂シタルニ族間ノ

區別ヲ滅却シタルノミナラス尙ホ當時宗教法ヨリ生スル所ノ二族間ノ障礙ヲ破壞シタルカ故ニ右ノ變革ハ政治沿革上最モ緊要ナルモノト言ハサルヲ得ス何トナレハ從來貴族カ平民ヲシテ政府ノ官吏ニ任スルコトヲ得セシメサリシ理由ハ一般ニ宗教上ノ無資格ニアリタレハナリ而シテ又二族間ノ婚姻ヲ禁止シタル所以ハ主トシテ宗族<sup>ゼンス</sup>ノ神聖<sup>サクハラ</sup>ヲ毀壞センコトヲ恐レタルニアルヲ以テ一タヒ此禁ヲ解除スルニ及テ政權ノ同等ヲ促セシコト蓋シ僅少ニアラサリシナリ然リト雖モ平民カ貴族ト同等ノ政權ニ達スル間ノ進歩ハ頗ル緩漫ナリシモノニシテカニウリアン法令ノ發布以還百五十年ノ久シキヲ經テ漸ク二族同等ノ地位ヲ占ムルニ至リシナリ故ニ羅馬建都四百六十七年即チ「ホルテンシア」法令ノ發布セラレタル時ヲ以テ吾人ハ始メテ二族ノ區別實際消滅シタリト公言スルヲ得ヘシ何トナレハ此法律ノ

發布ニ因テ平民ハ公法及ヒ宗教法ニ於テ同一ノ權利ヲ享有シ而シテ  
 「トリビウン」議會ノ命令ハ元老院ト「キリユ」議會ヲ認證ヲ要セズ直ニ  
 發布シ以テ全羅馬人民ニ法鎖ヲ生シタレハ是ヨリシテ二族ノ區  
 別ハ更ニ其痕跡ヲ止メス全ク同等トナリ、平民ハ支配人トナリ、市正ト  
 ナリ、奉行トナリ「ギユル、エーダエル」トナルヲ得ヘク又元老院議員  
 或ハ司法官トナルヲ得ヘク加之宗教法ノ特權ニ於ケルモ亦一トシテ  
 享有セサル者ナク僧正或ハ陰陽士トモナルヲ得、良シヤ猶ホ未ク殊別  
 ノ宗族ニ屬スル神聖サグタノ如キ或ハ二三ノ宗教儀式ノ如キ或ハ殊別ナル  
 神明ノ職務ノ如キハ干與スル能ハサリシト雖モ是等ハ固ヨリ政治上  
 ノ位地ヲ左右スルニ足ラサリシナリ故テ以テ法律史ニ關シテ是ヨリ  
 以後吾人ハ平民ト貴族ノ區別ヲ失フモ、ノ如シ

第十節 羅馬ヂヤスシビレ固有法

後世羅馬法學士ノ著述就中「ガイアス」シセロ「三氏ノ著書及ヒ今日吾人ニ傳ハル十二銅表ノ斷片等ノ數者ヨリシテ一般文明ノ進歩カ羅馬固有法ヲ變更シタル前既ニ羅馬早世ニ於テ存在シタル固有法ノ要領ヲ蒐集スルヲ得ヘシ

是等ノ古代法律ハ習慣ヲ以テ其基礎トナシタルモノナレハ十二銅表ニ記載セラル、モノ、外ハ唯口碑ニ由テ知ラル、ニ過キサルナリ而シテ後世是等ノ法律ヲ總稱シテ「シヤスシ、ウヰリ」則チ羅馬國ノ固有法ト言ヘリ

抑羅馬法ノ歴史ハ此所謂固有法ナルモノニ生シタル變化ト之ニ加ヘタル増補ト之ヲ實施スルニ當テ適用シタル方法トノ歴史ニ外ナラサルヲ以テ多クハ不文律タル此習慣法ノ全體ハ後世ノ新思想ニ感染シタル諸人ニ因テ廢棄セラル、ニ至ラサリシモ之カ爲メニ刪除若クハ

敷衍セラレタルコトハ羅馬法ヲ學ハント欲スルモノ、最モ明瞭ニ記  
 憶セサルヘカラサルモノ也羅馬固有法ハ常ニ羅馬法ノ發端ト爲サ、  
 ルヲ得サルカ故ニ後世其法律ノ沿革史ヲ討究スルニ當テ吾人ハ必ス  
 其固有法ノ尙ホ効力ヲ失ハスシテ依然其注意ヲ存シタルニモ關セス  
 時代ヲ異ニスルニ從ヒ此固有法ヲ削除シ若クハ補充シ以テ其時勢ノ  
 必需ニ應センカ爲メニ如何ナル方法ヲ以テ後世ノ法律ハ制定セラレ  
 タル乎ヲ討究セサル可ラス而テシ此固有法ハ羅馬帝國ノ末世ニ至テ  
 始メテ除去セサル可キノ傾向ヲ生シタリ吾人ハ羅馬私法ヲ論スル時  
 ニ於テ所謂固有法ナルモノ、重要ナル部分ハ如何ナルモノナルヤヲ  
 述ント欲スレハ今茲ニ之レヲ論スルヲ要セス唯吾人ハ羅馬法ヲ學ハ  
 ントスル人ニシテ若シ其綱領ニ通曉スルニ於テハ此等特殊ノ主義ハ  
 其濫觴ヲ太古蒙昧ノ時代ニ發シ後世法理ノ全體ニ影響スルモノニシ

テ其關係スル所主トシテ家族中其家父ノ位地及其所有地ノ相續又ハ耕地上地主ノ所領ニ關スル契約及ヒ詞訟等ヲ決定スルニアルコトヲ發見スル敢テ難キニアラサルヘシト云フニ止マルナリ

第十一節 伊太利征服

伊太利ノ征服及ヒ其他羅馬人ノ戰勝漸次其範圍ヲ擴張スルニ當テ實ニ羅馬法ハ其性質ナ一變シタルモノ、如シ何トナレハ征服セラレタル邦國都府ノ羅馬本邦ニ對スル種々ノ關係ヲ規定スルカ爲メニ自然全ク新ナル法律ノ一枝派ヲ發生シ來リタレハナリ蓋シ往古ノ他ノ國民ニ比スレハ羅馬人ハ概シテ其征服セラレタル人民ヲ支配スル極ノテ賢明寛大ナリキ實ニ二三ノ地方官ハ其權力ヲ擅ニシ大ニ人民ヲ苦シメタルモノアリシト雖モ要スルニ羅馬ノ政略ハ決シテ苛酷ナルモノニアラサリシナリ然リ而シテ羅馬ハ其附屬國民ノ須要ト服役ノ度

ニ從ヒ各之ニ比例シタル特權ヲ附與シ以テ相結合シタリ凡ソ羅馬史  
 ナル語ヲ熟知スルナラン夫ノ拉丁律トハ羅馬府民タルノ權利ヲ各市  
 府ノ人民ニ附與シタルヲ表明シタルモノナリ而シテ其權利ハ各都  
 府人民悉ク同一ナルニアラスシテ各其度ヲ異ニセリ或ハ獨リ交通貿  
 易ノ權ヲ有スルアリ或ハ兼テ又婚通權ヲ有スルアリ然レモ内國爭亂  
 (羅馬建都六百三十三年)ノ後シウリア法令同上六百六十四年及ヒプロ  
 ーシア法令同上六百六十五年ハポト河以北ニ住スル伊太利人ニ府民  
 タルノ全權ヲ授與シ而シテ伊太利人ヲ三十五種族ノ中ニ配分シタリ又  
 伊太利律トハ都府獨立權ノ幾分ト此獨立權ノ與ヘラレタル地方ヨリ  
 出スヘキ租稅トヲ免除スルヲ表明シタル者ナリ元來ポト河以南ノ  
 伊太利及ヒラテナイタスト稱スルモノ即チ拉丁人タルノ身分ヲ有ス



奉行ノ時  
代羅馬法  
ノ變遷

ル諸州ニ於ケル二三ノ特別ナル府民并ニ「ラテナイタス」チ有スルモノ  
 等ヲ拉丁殖民人ト總稱シタリ是等ノ人民ハ交通權ヲ享有セシト雖氏  
 婚通權ヲ享有セサリシナリ故チ以テ其子ニ對シテ充分ノ權力チ有セ  
 サルノミナラズ又官吏チ投票シ若クハ之ニ任スルノ權チカリシナリ  
 而シテ伊太利律ナルモノハ或ル特典チ有スル都府ニ限り附與セラレ  
 タルモノニシテ其他ノ諸州ハ一般ニ交通及ヒ婚通ノ二權チ享有セサ  
 リシナリ故ニ此等ノ州ハプロユンサン副議政官又ハプレートル奉行ノ配下ニ屬シ租稅ヲ羅馬  
 ノ國庫ニ納レ而シテ羅馬律中羅馬人ガ許與セタル部分ニ由テ支配セ  
 ラルモノナレハ其征服者ハ則チ羅馬人ノ便宜ト信スル所ニ從ヒ務  
 メテ羅馬ノ政治思想ニ符合セシメンコチ企圖セラレタリ

**第十一節 奉行ノ時代羅馬法ノ變遷**

然レ羅馬人ノ外邦人ト相觸レ相接スルニ及ヒテ羅馬法ニ最モ著シ

キ結果ヲ發生シ其結果タル所屬國人民ノ位地ヲ規定スルカ爲メ新ニ  
發生シ來レル法律ノ比ニアラサリシナリ蓋シ此外國交通ハ羅馬人民  
ノ法律思想ニ於テ一大變革ヲ生シタリト言ハシモ敢テ不可ナキナリ  
又長シヤ外國交通ハ此變革ヲ成就シタリト言フヲ得サルトモ之ヲ助  
成スルニ於テ與リテ力アリト言ハサルヲ得ス實ニ外邦ト相接スルニ  
當テ羅馬人民ハ彼我法律ノ組織ヲ比較セサルヘガラサルニ至リシハ  
又止ムヲ得サルノ勢ナリ羅馬法學士ノ語ニ據レハ是ニ於テ始メテ國  
際法即チ一般ニ他ノ國民ヨリ得ラレタル法律ハ羅馬古代ノ法律ナル  
固有法ト共ニ併存スルニ至レリト  
羅馬建國五百七年ニ外國奉行ナル者ヲ置キ以テ羅馬府民外ノ人民間  
ニ起リタル詞訟ヲ判決セシメタリ是羅馬府民カ從來因襲シ來リタル  
固有ノ法律ハ其區域甚タ狹隘ナルカ故ニ之ヲ以テ外邦人ヲ束縛箝制

スルヲ能ハサリシヲ以テナリ然ルニ羅馬法ノ最モ至要ナルモノニ至  
 リテハ府民ノ外何人タリト雖モ其保護ヲ受クル能ハサリシモノ、如  
 シ譬ヘハ「キリシヤム」所有權ト稱スル一種ノ所有權ノ如キハ府民ノ外  
 何人モ之レヲ有スル能ハサリシナリ然レモ一タヒ正理公道ノ外國人  
 ナシテ所有主タラシメサル可ラサルヲ指肅スルニ至テ外國奉行ハ府  
 民カ要求スル所ノ所有權ト相異ナルモノヲ認メサル可ラサルニ至レ  
 リ而シテマシストレイト司法官ハ外國人ノ場合ニ於テ行ハサル可ラサル所ノモノヲ  
 文明ノ暇々進ムニ從テ府民ノ場合ニ於ケルモ亦均シク之ヲ行フノ必  
 要ヲ感シタルヲ以テ司法官ハ羅馬固有法ノ主義ト異ナル所ノ主義ト  
 認定シ之ニ効果ヲ與ヘタリト雖モ此固有法ハ正義公道ヲ行フニ緊要  
 ナルモノヲ其規定中ニ備フルキハ依然其効力ヲ有スルモノニシテ唯  
 夫レ之ヲ備ヘサルキハ外國奉行ハ一層廣濶ナル法律ニ訴ヘ固有法ノ

欲典ニ對シテ之カ救濟ヲ衡平法ノ主義ニ需メタリ加之奉行ハ詞訟ヲ  
 公正ニ裁判スル爲メ自ラ欠ク可クサル法律ト確信スルニ於テハ之ヲ  
 裁判上ノ定規トシテ發布シタリ爾來日ヲ重ヌルニ隨テ奉行ハ就職中  
 自ラ根據トシテ取ルヘキ法理ヲ一ノ論告トナシ就職ノ始ニ於テ之ヲ  
 小冊子ニ編集シ公布スルノ習慣ヲ釀成スルニ至レリ斯ノ如ノ新任奉  
 行ハ必ス其就職ノ際ニ於テ先ツ論告ナルモノヲ公布セシカ故ニ爾後  
 逐次發布スルモノ積ンテ一堆ヲ成スニ至レリ之ヲ恒久論告ト稱シタ  
 リ奉行ハ詞訟方式ノ變遷ニ據リテ廣大寬濶ナル法律規則ノ制定セラ  
 ル、ニ隨ヒ大ニ其扶助ヲ得タリシコトハ吾人ガ民事訴訟法ヲ論スルノ  
 時ニ於テ瞭然タルヘシ  
 爾來日ヲ經ルニ隨テ右ノ法律ハ一般ニ採用スル所トナリ愈々其基礎  
 ヲ固フシヤス、オノウリアム即チ外國奉行ノ法律ハ羅馬固有法ノ補

助下シテ畫然之ト并存スルニ至レリ  
 判事、日奉行ハ詞訟ノ摸範ヲ判事ニ與ヘタリ元來羅馬ノ判事ハ數百年  
 ノ間元老議官獨リ之ニ任シタリシカ羅馬建都六百三十二年セソプロ  
 ニア法令ノ出ルニ及テ判事タルノ權利ヲ元老議官ヨリ取りテ之ヲナ  
 イトノ爵位ヲ有スル者ニ附與シタリ是ニ於テ乎多クノ爭論ヲ經テ此  
 權利ハ元老院議官トナイトノ爵位ヲ有スル人トノ二階級間ニ分與セ  
 ラレタルノミナラス猶ホ劣等ナル人種ニモ之ヲ擴張セリ故ヲ以テ元  
 老議官ノ此官職ヲ專有セシ時ニ當テ其數三百人ニ過キサリシモ漸次  
 其數ヲ増シオリガスタス帝ノ時ニ至テハ其數四千人ノ多キニ至レリ  
 年表ニ掲載スル判事ノ外ニ尙ホレキユペレトトルト稱スル一種ノ法  
 官アリ此官ハ當初訴訟ノ對手雙方外國人タル時ニ之ヲ裁決センカ爲  
 メニ設ケラレタル者ナリシカ其後府民ノ訴件ニ於テモ亦管轄權ヲ有

明法學士

第十三節 「シユリス、プルーデンツ」(明法學士)

スルニ至レリ蓋シ此法官ハ殊別ノ場合ニ於テ各階級ノ人民ヨリ採用  
 セラレシモノニシテ二名或ハ三名以上別席シ派出ヲ要スル場合ニ於  
 テモ亦此法官ヲ用非タリ右ノ外尙ホ百名ヨリ成ル所ノ「センダム」  
 リト稱スル法官アリ各種族ヨリ採用セラレタルモノニシテ身分財産  
 遺囑相續及ヒ無遺囑相續等ノ訴訟ヲ判決セリ  
 抑モ羅馬法律ノ進歩ヲシテ極メテ迅速ナラシメシモノハ法律ノ組織  
 及ヒ主義ヲ講究シ且其講究シ得タル組織及ヒ主義ヲ以テ其朋友子弟  
 ナ利益スル爲メ之ヲ傳播セシ所ノ「シユリス、コンサルター」或ハ「シユリ  
 ス、プルーデンツ」ト稱セシ學士ノ一體與リテ大ニ力アリ且此等ノ學士  
 ハ一般ニ國內ニ於テ第一流ノ地位ヲ占ムル社會中ニアリシヲ以テ其  
 職業ハ公務ヲ有スル者及ヒ司法官吏タル者ハ必ス修メサルヘカラサ

ルモノト思考セラルト、至レリ貴族ノ法律上ノ事件ヲ執行スヘキ  
 羅馬共和政治ノ昔ニ在テハ獨リ貴族ノミ法律上ノ事件ヲ執行スヘキ  
 正當ナル時日及ヒ訴訟手續ノ方式ヲ知リシナリ蓋シ「チアス、フラビス」  
 氏カ此等方式ノ類集及ヒ法律ヲ施行スル時日ノ目錄等ヲ刊行セシ  
 ノ一事ハ苟モ「リビ」ヲ讀ミタル人ハ皆テ親ク知了スル所ナルヘシ  
 而シテ法律講究ノ道ハ貴族平民ヲ論セス全體ノ人民ニ開カレシト雖  
 凡實際之上ヲ講究セシモノハ單ニ貴族平民中稍高等ノ地位ヲ占ムル  
 者ノミニ止マリシカ如シ又此等ノ學士ハ助言ヲ依頼スル者ヲ教諭シ  
 或ハ保護シ又ハ訴訟ニ必要ナル手續ヲ説明シ及ヒ訴訟ニ必要ナル書  
 式ヲ書キ與ヘタリ若シ法律ノ格段ナラ點ニ關シ疑問等起ル其ハ之カ  
 答案ヲ附セリ且此學士輩ハ唯十二銅表ヲ註釋説明スルカ如ク公言シ  
 タリト雖ヒ其註釋スル所ノ意義ハ極メテ廣濶ナルモノニシテ十二銅

表ノ精神中ニ含蓄シ得ヘキ全體ノ思想ヲ包有セリ蓋シ斯ノ如キ答案  
(レスポンス)ハ勿論法律タルノ効力ヲ有セサリシト雖モ彼學士輩ハ屢  
訴訟依頼人ト共ニ司法官ノ面前ニ出テ其持論ヲ吐露セシカ故ニ其答  
案ハ自然司法官ニ對シ現行法律ト同様ノ効力ヲ有セシコ少カラサリ  
シヲ以テ遂ニ碩學ノ答案ヲ法律ノ直接根據中ニ算入スルニ至レリ  
右ノ法學士中其名ノ今日ニ傳ハル者ニシテ議定官ケートト一氏及ヒシ  
セロ一氏ト同時代ノ人ナレモベラス、サルビニアス氏ノ如キハ特ニ吾  
人ノ知ル所ノ著名ナル者ナリ爾後共和政治ノ終ニ至リ明法學士ハ普  
通ノ教育ヲ受ケ且希臘派哲學ノ一斑ヲ通曉スル所ノ人ヨリ成立スル  
ニ至レリ而シテ此等學士ノ勢力ハ次第ニ強盛ニ赴キ裁判官ノ判決ニ  
對シ殆ント直接ニ其効力ヲ及ホスノ地位ニ至リシヲ以テ共和政治ノ  
末年法律變革ニ關シ甚ク強大ナル勢力ヲ有セシナ理會スルハ蓋シ難



第十四節 自然法

抑モ羅馬法學者カ布臘哲學ヨリ引用シテ羅馬法律ノ組織ニ與ヘタル  
 最大必要ナル増加ハ自然法ノ思想ナリトス吾人ハシセロー氏ノ文章  
 ニ據リ該思想ノ起因スル所及ヒ該思想ノ精神如何ニ理會セラレシカ  
 ナ知ルヲ得ルナリ實ニ該思想ハ遠ク「ストイック」派「希臘學派」ノ名ナリニ  
 源因シ特ニ「クリシパス」派ヨリ來リシモノナリ今「ナチユラ」(自然)ノ意義  
 ナ尋ヌルニ「ナチユラ」トハ天地萬象ヲ意味スル者ニシテ「ストイック」派ノ  
 說ニヨレハ此宇宙ハ道理ニ因テ引導支配セララル、モノナリト而シテ  
 シセロー氏ハ或ハ「ナチユラ」ニ代ユルニ「マンダス」ナル語ヲ以テセシ  
 アリ此道理ナルモノハ斯ノ如ク或ル事ヲ命令シ或ハ禁止スルノ管理  
 力ナルカ故ニ乃チ法律ト稱セシナリ然レ「ストイック」ト派ノ說ニ從フキ

ハ自然ナルモノハ同時ニ自動的、他動的ノ原理ナレハ自然ノ外別ニ自然法ノ原因アラサルナリ故ニ自然法トハ宇宙ノ事々物々ヲ裁判スル所ノ力ヲ謂フモノニシテ其力ハ宇宙ノ元氣ニ附着シ離ルヘカラサル所ノモノナリ

凡ソ人類タルモノハ道理ヲ有シ道理ナルモノハ天地間二種アルノ理ナシ故ニ宇宙ノ(道理)ハ即チ人間ノ道理ト同一ナラサルヘカラス是ニ由テ之ヲ觀レハ自然法ハ人間ノ行爲ヲ引導シ併テ宇宙ノ事物ヲ支配スル所ノ法律ナラサルヘカラス故ニ德義或ハ道德上ノ美事ハ道理ト一體ナルモノ或ハ宇宙ノ法律ト一體ナルモノナリト言フモ不可ナカルヘシ

以上論述スル種々ノ思想ハ羅馬法律中ニ活動染浸セシモノニシテ要スルニ羅馬法學士タルモノ道德ヲ探テ以テ法律ト看做セシカ如ク而

シテ羅馬法學者ハ道德ト法律トノ間ニ於テ更ニ其區別ヲナサ、リシ  
ナリ

夫レ斯ノ如ク自然法ハ則チ法律ナレハ之ヲ羅馬法律中ニ列セサルヘ  
カラス彼ノ羅馬奉行<sup>プレートル</sup>ハ自家ノ判決ヲ以テ嚴然タル法律中ニ置キ如何  
ナル道德力モ之ヲ左右シ能ハサルモノト爲シ終ニ自然法ヨリシテ判  
決ニ効力ヲ及ホサシムルニ至レリ是レ實ニ道德上斯ノ如ク爲スチ正  
當ト爲スノ故ノミナラス尙ホ自然法ハ即チ法律ナルヲ以テノ故ナリ

第十五節 立法ノ淵源、民會ノ命令、布告、及ヒ元老院

羅馬百人議會ハ宣戰講和ノ議題ヲ裁決シ及ヒ高等司法官ヲ撰擧スル  
カ爲メニ集會セシト雖ヒ羅馬法律全體ニ對シ實際ノ變更ヲ與ヘタル  
モノハ「ホルテンシア」法令ノ出テシ後ハ獨リ「プレビスサイタ」(民會)ニ外  
ナラサルカ如シ

立法ノ淵  
源民會ノ  
命令布告  
及元老院

「トリビウータ」議會ハ羅馬立法權ノ中心ナリト認メラレシト雖モ羅馬共和政治ノ晩年ニ至リテハ元老院ノ命令モ大ニ勢力ヲ有スルニ至レリ  
ガイアス氏言ヘルアリ曰ク人皆ナ元老院ノ布告ハ法律タルノ効力ヲ有スルヤ否ヤノ疑問ヲ起スニ至レリト蓋シ共和政治ノ當時ニ在リテハ元老院ノ布告ハ元老院ニ屬シ一種特別ノ權力ヲ以テ斷行スル事柄ニ關スル時ヲ除クノ外毎ニ法律タルノ効力ヲ有セサリシナリ然レモ憲法上効力ヲ有スルモノト認定セラレタル他ノ布告トハ殆ト同一ノ効力ヲ有セシモノ、如シ  
十二銅表ノ頒布ト羅馬帝國開基トノ間ニ經過セシ所ノ時代ニ於テ羅馬法律ノ成長進歩セシコトハ審ニ訴訟法及ヒ奉行訟法制度ノ廢棄ニ依テ之ヲ知リ得ヘキノミナラス尙ホ古代ノ所有權移轉法ノ變シテ口

頭或ハ文書契約トナリ或ハ責任ニ關スル法律ノ進歩及ヒ物品ノ交付ヲ以テ契約ヲナスノ外一ノ契約ノ方式ヲ要セサル物品上ノ契約法ヲ認定シ且純粹ニ合意上ヨリ成ル四種ノ契約ノ方式モ亦羅馬固有法ノ一部ニ編入シ或ハ義務ヲ認定履行スルニ必要ナル事件ヲ添加スル等種々ノ改良アリシヲ見テ之ヲ證スルニ足ルナリ又奉行ハ所有權ノ外別ニ占有權テ規定シ且之ヲ保護セリ又相續法ニ關シ父タル者其子ヲ相續セシメサル場合ニ制限ヲ設ケ無遺囑相續ニ於テハ宗族ニ易フルニ正系親ヲ以テスルヲ許セリ

## 羅馬皇帝

## 第十六節 羅馬皇帝

羅馬帝國前數代ノ帝王ハ單ニ共和政府司法部ノ重要ナル長官ナリシカオ一ガスタス帝及ヒ其嗣子ニ至リ國內總テノ高等官職ヲ以テ一身ニ歸セシメタリ故ニ後世羅馬法學者ハ羅馬人民ニ自家ノ有スル行政

立法ノ諸權利ヲ帝王ニ委托セシモノナリト想像セリ此ノ如クニシテ共和政治ノ假裝ヲ借り專制政治ノ實體ヲ隱蔽シタリ而シテ羅馬國當初百年間ハ帝王ハ唯々共和政體ノ統領タルニ過キス下自稱セリ吾人ハオトガスタス帝ノ時代ニ於テスラ判決ヲ以テ獨リ帝王ノ力ニヨリ法律ノ効力アルモノトナスヲ得ルノ例ヲ有スト雖凡尙ホ前代ニ於テハ人民後代ニ於テハ元老院ノ二者ハ羅馬法律ノ淵源ト認定セラレタルヲ知ルナリ

帝王ハ次第ニ立法權ヲ濫用シ元老院ニ命シテ法律ヲ制定セシメ或ハ近時ニ至リテハ帝王自ラ法律ヲ制定スルニ至リ終ニ帝王ノ意思ハ即チ法律タルノ効力ヲ有スルニ至レリ而シテ帝王ノ意思ハ布告ヲ發布シ司法官ノ資格ヲ以テ如何ナル法律ヲ頒布セサルヘカラサルヤヲ決シ或ハ諭達ヲ發シテ一局官吏ニ命令シ或ハ教令ヲ發シテ一箇人若ク

## 法律

ハ公衆ニ論議シ又時々先例タルヘキ効力ヲ有スル裁判宣告書ナル判決書ヲ公布シ又或ル事件ニ關シ疑點ヲ生シ司法部ニ於テ判決ニ苦シミ帝王ノ敕裁ヲ仰キシトハ之ニ與フル所ノ敕答即チ指令ヲ付シ之ヲ以テ直チニ法律トナス等實ニ立法權ノ濫用ハ其極度ニ達セリ

## 第十七節 法律

帝國開闢後數年間羅馬人民ハ法律制定ニ孜々トシテ敢テ止ムコトナク總テ此等ノ法律ハ實ニ國帝意思ノ創造ニ係ルモノナリ  
 オーガスタス帝ノ如キハ後世私法ニ於テ著ルシキ新奇ノ觀ヲ呈セシメシ所ノ方法ヲ設ケ立法部ノ批准ヲ得タリ蓋シ此等ノ立法タルヤ社會秩序ノ紊亂腐敗ヲ禁遏防止スルノ目的ヲ以テ設ケラレタルモノナリ  
 デユリア及ヒパピアポツパーノ法令其他此ト同性質ヲ有スル法律ハ

# 元老院

家族義務ヲ怠ルト否ヲサルトニ依リ褒賞刑罰ヲ施スノ方法ヲ以テ一箇人ノ徳義ヲ保維セシメンコトヲ務メ即チ婚姻セサルモノ或ハ小兒ヲ有セサルモノニ科スルニ其父遺囑ノ利益ヲ賦與セサルコトヲ以テシ而シテ婚姻シ或ハ小兒ヲ有スル者ニハ之ヲ賦與シ若シ此等ノ人ナキハ其利益ヲ國庫ニ收メタリ然レモ此法ハ其目的ヲ達スルヲ得スシテ只ク遺囑及ヒ遺囑贈與ニ關スル法律ノ部分ノミ此法ノ爲メ大ニ變更スル所アリシ又遺囑添附書及ヒ遺囑委託ノ如キハオーストリアガスタス帝ノ時代ニ始リタル者ナリ

## 第十八節 元老院

第一世紀ノ中頃ヨリ以降吾人ノ知了スル立法部ノ布告ハ即チ元老院ノ布告ナリ而シテ司法官吏ノ撰擧權ハ其始メ民會ニ於テ之ヲ掌握セリト雖モ後チ元老院ノ司ル所トナレリ



又元老院ハ帝王及ヒ國家ニ對シテ犯セシ罪科ヲ處理スルノ權及ヒ下等裁判所ヨリ控訴スル事件ヲ裁決スル權ヲ委托セラレタリ事情此ノ如クナリシカ故ニ後世ノ法學者ハ當時ノ元老院ヲ以テ人民總體ノ代表者ナリトセリ如何トナレハ府民ノ員數過多ニシノ政治上一體トシテ其活動ヲ試ミル能ハサレハナリ

今歴史ニ徴シテ之ヲ觀ルキハ後世法學者ノ說寧ロ虛妄ト謂フヲ得ヘシト雖モ帝國ノ古代ニ在リテハ元老院ハ固ヨリ帝室ト異ナリタルモノニシテ且ツ帝室ニ反對セシモノナリ故ニ彼說ヲ以テ全ク虛妄ナリト謂フヲ得ヌ即チ吾人ハタシタス中ニ於テ許多ノ著名ナル例ヲ有スルナリ

書中言ヘルアリ曰ク元老院ハ敢テ自家ノ意見ヲ發言シ且其名ハ元老院タリト雖モ其實寧ロ共和政體中ノ遺物ナリト然ルニ其後元老院ハ

奉行ノ諭告

Edictum perpetuum.

次第ニ獨立獨行ノ思想ヲ滅却シ遂ニ其主即チ帝王ノ意惟レ奉スルニ至レリ

第十九節 奉行ノ諭告

每歲羅馬外國奉行ノ發スル所ノエデクタムパルベチユアム恒久諭告ハシヤスオノウリアム(每歲外國奉行ヨリ發布セラル、諭告ヲ謂フ)ノ註釋ニシテ羅馬法學者ノ著書中十ノ八九ハ皆之ヲ論題トセリ

ハドリヤン帝ノ時代ニ於テ彼ノ有名ナル法學者サルピアスシユリアナス氏ハ同帝ノ命ヲ受ケ一ノ諭告書ヲ編纂セリ抑、此諭告タル一部ハ現存スル所ノ布告ヲ採リ一部ハ同氏自家ノ意見ヲ以テ之ヲ編纂セシカ是蓋シ後世奉行ヲシテ此法ヲ以テ原則規矩トシテ之ニ據ラシメンカ爲メナリ

法學者

バルベチユアム恒久論告ト稱セリ蓋シバルベチユアムナル語ハ元來  
布告ノ每歲發布セラル、トナ意味セシモノナリシカ此時遂ニ其意義  
ヲ變シ恒久不易ナルトナ意味スルニ至レリ而シテ各種ノ司法官ニシ  
テ該法ヲ適用セントスルモノハシユリアナス氏カ制定シタル論告ニ  
明條アラサル場合ニ限り自家ノ意見ヲ以テ論告ヲ發スルトナ得ルモ  
ノトセリ

第十一節 法學者并ニラベオ及ヒカピット兩學派

抑羅馬法律歴史ニ於テ極メテ著シキ觀象ヲ顯出セシモノハ法學者ノ  
文書、法學者ノ斷案ニ附與セシ權力及ヒ法學者カ實ニ賞美スヘキ方法  
ヲ以テ法律ヲ發暢整頓セシメタルノ三事ナリトス  
オトガスタス帝ハ當時法律大家カ天下ノ輿論ニ對シテ有スル地位ハ  
同帝ノ企圖セシ政略ヲ實行スルニハ最モ必要ニシテ欠クヘカラサル

コトヲ發見シタリ而シテ遂ニ慣習ニ據リ實際其勢力ヲ有スル所ノ法  
學者ノ判決ニ正當法律タルノ允准ヲ與ヘタリ且ツ天下ニ公布シテ曰  
ク法律家ノ答案ハ正當ノ式ヲ履ミ之ヲ請求且之ヲ公布セサルヘカラ  
ス而シテ其答案ハ皇帝ノ允准ヲ經テ始メテ法律タルノ効力ヲ有スヘ  
シトハドリアン帝モ亦法律家ノ答案ヲ以テ法律タルノ効力ヲ有スル  
モノトセリ然レトモ若シ答案中彼此意見ヲ異ニスル時之ヲ撰擇スル  
ハ裁判官ノ自由ニ任スルモノトセリ

オーガスタス帝ノ時代ニ於テ有名ナル法律家中ニドレハテアス氏ナ  
ルモノアリ氏ハ法典ニ記載スル如ク特ニマーデシル(遺囑書附録)ヲ許  
可スルノ適否ニ付キオーガスタス帝ノ下問ヲ受ケタリ而シテ當時尙  
ホ有名ナル法律家中ニアンチステアスラベオ氏及ヒアンイアスカビ  
ツト氏ナル二家アリテ法律ノ問題ニ付キ反對ノ説ヲ有シ互ニ互角ノ

勢ヲ相爲シ終ニ後世ニ傳リタルニ大法學派ヲ結成スルニ至レリ  
 ラベオハ博學多識自然哲理ノ原義ヲ以テ根據トシ大ニ一派ヲ成シ純  
 理ト自信スル者ヨリシテ法律上ニ變更ヲ試ムルニ於テ少シモ躊躇ス  
 ルコトアラサリシ其ニ對シテハ  
 カピオ氏ハ又先代ヨリ傳來シタル法理即チ羅馬ノ成法ヲ固守スルニ  
 於テ大ニ其名ヲ顯ハセリ  
 右二氏一タヒ世ニ出テシ以來天下ノ法曹或ハラベオ派ノ旗ヲ樹テ或  
 ハカピット派ニ左袒シテ互ニ論難討議セリ而シテ該兩學派ノ元祖ハ  
 ラベオ氏及ヒカピット氏ナリシカ後世ニ至リテ該二派ヲ稱スルニ右  
 二家ノ名ヲ以テセス一チプログリアン派ト云ヒ他チサビニアン派ト  
 稱セリ是蓋シプロクリアン派ト稱セシハラベオ氏ノ後該派中ニ卓越著  
 名ナルプロクラス氏ナル者出テシヨリ爾來ラベオ派ヲプロクリアン

氏ガイアス

派ト稱シタリ

又カピット氏ノ後其派中ニ有名ナルサビナスナル者出テシヨリ爾來カ

ピット派ヲサビニアシテ派ト稱セシナリ

彼ノガイアス氏ハ自ラサビニアシテ派ノ法律家ト稱スルト雖モ其說タ

ル法律上ノ精微ナル疑問ニ關シテハ以上二派ト全ク異ナル所ノ論說

ヲ吐露シ別ニ一機軸ヲナスモノト謂フヘシ

爾來有名ナル法律家輩出シ大ニ法律ノ改良進歩ヲ圖リ終ニ羅馬法理

學五大家ノ顯ハルニ至レリ即チ五大家トハガイアス、パピニアシ、ボ

ール、ウルピアン及ヒモデステナス氏ヲ稱スルモノニシテ今日吾人ノ

知ル如ク此等大家ノ論說ハ後世法律ノ一種特別ナル淵源トナレリ

### 第二十一節 ガイアス氏

ガイアス氏ハハドリアン帝ノ時代ニ生レアシトニン帝ノ時代其書ヲ

著ハセリト雖凡其一身上ノ歴史ハ吾人得テ之ヲ知ル能ハス  
 ガイアス氏ハ自ラ稱シテサビナス學派ナリト云ヒ氏ノ著書トシテ世  
 人ノ知ル所ノモノ、外猶ホ「エデクタムプロビンシアル」論「地方縣令」  
 云フ及ヒ十二銅表註釋ノ二書アリ其他氏ノ著作中最モ世人ノ知ル所  
 ノモノハ彼ノ法綱ナリトス  
 抑此法綱ノ原稿ハ紀元一千八百十六年ニ「ボル」氏カ發見セシモノニ  
 シテ近世羅馬法律ニ大ナル進歩ヲ與ヘシモノト謂フヘシ而シテ此法  
 綱ノ原稿タル「セントシエロミー」ノ文字ヲ以テ之ヲ書シ且該書ノ存在  
 シタルヤ否ヤハ前ニモ言フ如クニ「ボル」氏カ「ペロ」ナ府ニアル「チ」  
 圖書館ノ目錄ヲ調査スルノ際ニ發見シタルマテ決シテ世人ノ知ラ  
 サリシ所ノモノナリ  
 ガイアス氏ノ法綱ハ「シヤ」スチニア「ン」法典ノ基本ニシテ「シヤ」  
 スチニア

ン帝ハ法典ノ順序ヲ悉クガイアス氏ノ著書ヨリ採リシナリ且其註釋  
ノ如キモ同帝ノ法典編製ノ時代ニ適應スルモノハ悉ク同氏ノ著書ニ  
從ヘリ故ニガイアス氏ノ法綱ハ二時代(ガイアス氏ノ時代トシヤスチ  
ニアソノ時代)ニ涉リテ其間ニ生セシ法律ノ變化如何ヲ顯ハシ尙ホ又  
法律組織ノ極メテ完全ナリシ時代ノ法律如何ヲ吾人ヲシテ容易ニ之  
ヲ了解セシムルモノナリ

第二十二節 パピニアソ氏

イミリアナス、パピニアソ氏ハセプトミアスセベラス帝ノ寵愛ヲ受  
ケタル人ニシテ現時ノ最高等判事ニ等シキプレトリアソ、フレフエソ  
ト(太守)ノ職ヲ奉セリ

パピニアソ氏ハセベラス帝ニ扈從シブリテンニ赴キ紀元二百十一  
年ヨルク府ニ於テ該帝崩御ノ際其席ニ列セリ帝死ニ臨ミパピニアソ



氏ニ其二子ゲター及ヒカラカラノ保護ヲ委托セリ然レトモカラカ  
 ラ長スルニ及ヒパビニアナスノ職ヲ解キ而シテゲターヲ暗殺シタル  
 後其身ノ保護ヲ再ヒパビニアナスニ要求セリト雖モパビニアナスハ  
 之ヲ拒絶セシヲ以テ大ニカラカラノ忿怒ヲ招キ終ニ同帝ノ命ニ依テ  
 死刑ニ處セラレタリ

パビニアン氏ハ羅馬法律家中未曾有ノ大家ニシテ氏以後ノ法律家ハ  
 皆口ヲ極メテ同氏ヲ贊美稱揚セリパビニアン氏ノ著書ニシテ今日吾  
 人ノ知ル所ノモノハ法律類集ノ記載スル所ニ依レハ疑問ノ答案及ヒ  
 法學定義等ニシテ此等ノ書ヲ見ルトキハ實ニパビニアン氏ノ博學多  
 識衆法律家ニ卓越スルノ才智ヲ有セシコトヲ知ルニ足ルナリ

### 第二十三節

ポール氏

ポール、ウルピアン及ヒモデステナスノ三家ハ皆パビニアンノ徒弟ナ

ウルピア  
ン氏

千六百  
年

リト稱ス紀元二百二十二年シユリヤスポラヌハアレキサンドルセ  
ベラス帝ノ朝ニ在テ樞密院ノ議官及ヒプレトリアン、プレフエクト(太  
守)ノ職ヲ奉シタリ氏ノ著述ニ係ル數書ノ外ニ猶ホ吾人ノ知ル所ノモ  
ノハ「リセプタ、センテンシア」ニシテ是要班牙國ノビシゴス人種中コテ  
法律ノ重要ナル淵源トナリタルモノナリ而シテポール氏ノ著作中最  
モ有名ナルモノハ彼ノ「アド、エデクダム」ニシテ其數八十卷アリ

### 第二十四節 ウルピアン氏

ドミテアス、ウルピアナス氏ハ自ラ稱シテフエニシア國タイル人ノ血  
統ナリト云ヘリ氏ハセプテミアス、セベラス及ヒカラカラ二帝ノ治世  
間種々ノ書ヲ著シ紀元二百二十八年アレキサンドルセベラス帝ノ面  
前ニ於テ兵卒ノ毒手ニ罹リテ死去セシカ其死去ノ當時ハプレトリア  
ン、プレフエクト(太守)ノ職ニ在リシト雖ヒ其就職ノ時日ハ今之ヲ知ル

羅馬法沿革史

五十七

能ハサルナリ  
類集法典ニ記載スル所ノモノニシテウルピアン氏ノ文書ヨリ引用セ  
シモノハ他ノ法律家ノ著書ヨリ引用スルモノニ比シテ其數極メテ多  
シ而シテ此等類集法典ニ記載スル所ノモノハ外吾人ノ能ク知ル所ノ  
著書ハ彼ノ「フラツグメンタ、ウルピアナイ」ニシテ其數二十九篇アリト  
云フ

### 第二十五節 モデステナス氏

ヘレニアス、モデステナス氏ハパピニアン及ヒウルピアンノ徒弟ニシ  
テアレキサンドル、セベラス帝ノ時代ニ於テ樞密院ノ議官トナリシカ  
其他吾人モデステナス氏ニ付キ何等ノ事實ヲ知ル能ハサルナリモデ  
ステナス氏ノ著述中吾人ノ最モ能ク知ル所ノモノハ「エツキセキ」ト  
シヨナム、リブライナリ此外類集法典中ニ記載スル同氏論文ノ拔萃ヲ

モ  
デ  
ス  
テ  
ナ  
ス  
氏

羅馬法律  
ニ於ケル  
耶蘇教ノ  
勢力

除ク外一モ吾人ノ知ルモノアラサルナリ

### 第二十六節 羅馬法律ニ於ケル耶蘇教ノ勢力

抑々羅馬法律ニ及ホセシ耶蘇宗教ノ勢力タル一部ハ直接ニシテ一部ハ間接ニ及ホセシモノナリ惟フニ神聖政府階級ノ設立宗教上ノ會社ニ附與セシ財産ヲ所有スル權力耶蘇教ト他異教間ノ區別宗教法廳ノ設置其他巨多ノ新設制度等ハ羅馬法律ニ直接格段ナル變化ヲ與ヘシモノトス然レトモ實際其組織ノ必要ナル部分ニ因テ來シタル勢力ヨリ寧ロ其精神ニ因テ影響セラレシ勢力カ著大ナルカ如シ

府民ノ互ニ結合一致セシ社會ニ次テ普通宗教ノ羈絆ニ依テ結合スル所ノ社會起レリ蓋シ此變遷ノ傾向タル古來社會ニ附着スル所ノ障礙ヲ除去スルニ在リシナリ今吾人若シ「シヤスタニア」法典ト「ガイアス」法綱トヲ比照セハ婚姻法相續法及ヒ其他種々ノ法律ノ枝葉ニ於テ生

セシ變化ヲ發見シ耶蘇教カ勸誘セシ仁慈及ヒ尊敬ノ精神ヲ認知スル  
 コト難カラサルヘシ羅馬古代法律ニ存スル奇異ノ狀態ヲ脱却セント  
 スル思想ハ羅馬後世ノ法制ニ就テ認知スルヲ得ルモノニシテ實ニ一  
 部ハ宗教的原因ノ結果ト云フヘシ然レトモ又一部ハ新宗教耶蘇教ヲ  
 云フノ爲メニ生セシ思想及ヒ感情ノ變更ヨリ生セシ結果ト云ハサル  
 ヲ得ス此ノ如クシテ羅馬帝王ノ下ニ於テ其變更ヲ受ケシモノハ舊ニ  
 法律ノ實體ノミニ止ラス猶ホ訴訟手續ノ方式ノ如キモ亦大ニ變更ヲ  
 來セシヲ以テ方式裁判制度ハ方式裁判制度ハ嚴格ナル方式ニ依ラサレ  
 ナ指時代ニ於テ施政官ハ時或ハ判事ヲシテ訴訟ヲ審理セシメスシテ  
 自カラ之ヲ裁決セリ而シテ之ヲ常例外即チ非常ノ審理ト名附タリ此  
 ノ如キ慣習次第ニ羅馬帝王諸代ノ下ニ流行シ遂ニ紀元二百九十四年  
 ニ至リダイオクレシアン帝大ニ布令ヲ出シ各州知事ヲシテ總テノ訴訟事件ヲ

ニ  
マ  
シ  
テ

セ  
オ  
ド  
シ

ア  
ス  
第  
二

世

審理セシメタリ爾來法律ハ帝王ノ裁決布告ニ依テ變更ヲ受ケ直接ニ  
施政官ノ掌ル所トナリ方式裁判制度及ヒ奉行ノ法律註釋ハ既往陳腐  
ニ屬スルニ至レリ

### 第二十七節 セオドシアス第二世

吾人ハ今將サニシヤスチニアン帝ノ法制ニ論及セントスルノ前ニ於テ  
第二世セオドシアス帝カ法律ヲ決定整置シ及ヒ其研究ヲ獎勵シタル  
ノ事跡ヲ畧序セント欲スルナリ

紀元四百二十五年第二世セオドシアス帝ハ法律學ヲシテ宇内ニ普及  
セシメ且ツ之ヲ永久保存セシムル爲メ君斯坦丁堡府ニ於テ一ノ法律  
學校ヲ設立セリ而シテ該帝及ヒハレンチニアン帝ハ彼ノ五大家ト稱  
セラレシガイアス、パピニアン、ウルピアン、ポール、及ヒモデスチナスノ  
著述ヲ編纂シ以テ最高ノ勢力ヲ有スル法律ノ淵源トナセリ即チ紀元

四百二十六年ニ於テ「ロー、ナフ、シテイイシヨシ」援言法ト稱スル憲法ヲ發  
 布シ其命令ニ曰ク凡ソ判事ハ常ニ己上五大家中ノ多數ノ說ニ從ハサ  
 ル可ラス若シ五大家中或ル一點ニ付キ反對ノ說ヲ有スル者同數ナル  
 トキハパピニアン氏ノ說ニ從ハサル可ラス然レトモ若シ該疑點ニ就  
 キパピニアン氏ノ議論アラサルトキハ判事各自己ノ意見ニ從フコト  
 ナ得ヘシト

紀元四百三十八年ニ於テセオドシアス帝ハコンスタンチン帝以來發  
 布セラレシ總テノ法律ヲ蒐集シテ一個ノ成典トナシ之レヲ發布セリ  
 蓋シ該成典タル法律家グレゴリナス氏(紀元三百零六年)及ヒハルモゼ  
 ニアナス氏(紀元三百六十五年)ノ編纂ニ係ル類集法典ヲ採テ摸範トナ  
 セシモノナリ

第二十八節

シヤスナニアン帝

シヤスナ  
ニアン帝

シヤスニチニアノ帝ハ其先ゴシツク人ヨリ出テ初名チアプロイダト云ヒ  
 其文字タル正直ノ義ヲ表スルモノニシテ蓋シ羅匈語ノ「シヤスチナス」  
 ト其意義同一ナルカ如シ帝ハ殆ント紀元四百八十二年バルガリヤノ  
 トノリシアムニ生レ其伯父シヤスチン帝ノ養嗣トナリ紀元五百二十  
 七年嗣テ帝位ニ昇リ在位三十八年其間種々ノ事變ニ遭遇シ紀元五百  
 六十年ニ於テ薨去セラレタリ

シヤスチニアノ帝ノ將軍ベリサリアス氏ノ秘書官タルプロコピアス  
 氏ハ當時ノ時勢ニ付テ感スル所アリ秘密ノ紀事ヲ著シ之レ夫後世ニ  
 傳ヘリ吾人若シ此紀事ヲ以テ信實ナルモノトシシヤスチニアノ帝ノ  
 人トナリテ判定スルヲ得ルトセハ帝ハ實ニ貧賤虛弱ノ虐主ト云フモ  
 敢テ不可ナカル可シ今一例ヲ舉テ之ヲ證センニ皇帝宮中一切ノ管理  
 ノ如キハ全ク其后セオドラノ掌中ニ委テ東方帝國ノ弊習ト均シク實



ニ其腐敗ヲ極メタリセオドラ后ハ元一卑賤ノ女優ナリシカザヤスチ  
 ニアン帝之ヲ舞臺ヨリ玉臺ニ拔擢シ遂ニ政權ニ參與スルニ至ラシメ  
 タリ蓋シシヤスチニアン帝ノ善ク其英名ヲ後世ニ輝セシ所以ノモノ  
 ハ唯其諸將校ノ戰勝ト皇帝ノ名稱ヲ冒スル成典アルノ致ス所ニシテ  
 若シ之レ無カリセハ東方諸帝國ノ冗長ナル年表中ニ其名ヲ列スル所  
 ノ帝王ト更ニ區別スル所アラサリシナルヘシ

## 第一成典 第二十九節 第一成典

紀元五百二十八年ニ於テシヤスチニアン帝ハセオドシアス帝ノ法典  
 及ヒ古代ノ成典トヲ根據トシ新成典編纂時代ニ至ル迄帝國全体ノ憲  
 法ヲ含有スル一新成典ヲ編纂スヘキ訓令ヲ發布シ該成典編纂ノ爲メ  
 拾人ノ委員ヲ設ケ其翌年ニ至リ編纂ノ事業全ク成功シ紀元五百二十  
 九年四月帝王自ラ之ニ制裁ヲ與ヘ悉ク從來ノ類集法典ヲ廢止セリ

## 第三十節 類集法典

紀元五百三十年十二月成典編纂委員ノ一人ナルトリボリアン氏ハ其才能ト膽力トニ依リ皇帝ノ擢拔ヲ蒙リ自ラ十六人ノ委員ヲ撰拔シ古來法律家ノ文章ニシテ最モ秀勝俊逸ナルモノヲ悉ク撰擇蒐集シ以テ法律ノ一大成典ヲ編纂スヘキコトヲ命セラレタリ

羅馬君斯坦丁堡及ヒベリタス等ニ於テハ有名ナル法律學校ノ設立アリシト雖モ當時ノ法律家カ古代法律家ノ文書ニ就テ學ヒ得タル學識ハ非常ニ淺陋ナルモノナリシニ因リテ其後ハ大ニ其學問ノ旨ヲシヤスナニアン帝ハ畜ニ冗長繁雜ニ涉ラサル法典ヲ以テ天下ニ普及セシメシコトヲ企テタルノミナラス猶法學ヲ研究スルニ必要ナル律書ヲ編纂スルヲ以テ目途トセリ

曩キニ古代法律調査ノ命ヲ受ケシ十六名ノ委員ハ僅々三ヶ年間ニ於

テ其事業ヲ成功シ紀元五百三十三年十二月三十日ヲ以テ帝王自ラ之  
 ヲ批准シ法律タルノ効力ヲ與ヘリ即チ之ヲ稱シテ類集法典或ハ「パン  
 デクタ」ト云ヘリ其册數併セテ五十卷恒久ノ論告ヲ摸範トシテ之ヲ編  
 輯シタル者ナリウルピアン氏ノ著述ニ係ル布告集ハ當時羅馬帝國ノ  
 諸法律學校ノ教科書ニ用ヒラレシヲ以テ大ニ其勢力ヲ學者間ニ有シ  
 編纂委員輩ヲシテ編輯ノ次序ヲ學理的ノ方法ニ取ラシメスシテ他ノ  
 方法ニ依ラシメタルハ全クウルピアン氏カ布告集ノ影響ト云ハサル  
 ヲ得ス

抑々類集法ハ三十九名ノ法律大家ノ著書ヨリ拔萃シテ編纂サレシモ  
 ノナルカ就中ウルピアン及ヒポール氏ノ文書ハ法典全部ノ一半ヲ占  
 ムルト云フ

第三十一節 法典

類集法典ハ極メテ浩濶ニ過キ之レヲ會得スルニハ莫大ナル法律上ノ  
 智識ヲ要シ初學ノ輩ニ便ナラサルカ故ニシヤスチニアン帝ハ法律學  
 ノ階梯タル一書ヲ編纂センコトヲ企望シ紀元五百三十年十二月類集  
 法典編纂ノコトヲ布告セシ憲法中既ニ其意ヲ天下ニ現ハセリ而シテ  
 トリポニアン氏及ヒ君斯坦丁堡府法律學校ノ教授タルセナプヒラス  
 氏及ヒバリタス學校ノ教授ナルドロセアス氏ニ命シ之ヲ編輯セシメ  
 紀元五百三十三年十二月三十日ニ於テ類集法典ト等シク之ニ法律ノ  
 効力ヲ付與シタリ是レ即チシヤスチニアン法典ト稱スルモノナリ抑  
 モ此法典ハガイアス氏ノ法綱ヲ根據トナシ類集法典及ヒ成典ト抵觸  
 スル部分ノミヲ校訂シタルモノナリセオファイラス氏ハ此法典ノ天下  
 ニ發布セラレテ後チ幾何モナクシテ之レヲ希臘語ニ義譯シタリ此ニ  
 於テ羅匈語ヲ以テ書載シタル原本ニ一層ノ明光ヲ與ヘ東方希臘ニ於

テ該法典ノ傳播セシハ全クセテフイラス氏義譯ノ功ナリト云フヘシ  
 以上述ル如ク東方帝國ニ於テシヤスチニアン法典ノ傳播シタル全  
 ク希臘義譯ト法典拔萃ノミニシテ以後ハ絶ヘス歴代花王ノ發布セシ  
 憲法チ之ニ添挿セリ若シ然ラサレハ羅馬法律ノ智識ハ東方ニ於テ全  
 ク消滅シタルヤ明カナリ然レトモ西方ニ於テハ大ニ其趣チ異ニシ紀  
 元五百五十四年シヤスチニアン帝布告チ發シテ該帝ノ編纂ニ係ル全  
 體ノ法律書ハ伊太利國ノ法律トシ遵守セサル可ラサルコトヲ命令セリ

第三十二節 五十條ノ裁決並ニ第二一成典

五十條ノ  
 裁決并ニ  
 第二成典

古代法律家ノ頃ヨリ起因セシ法律ノ疑點ニシテシヤスチニアン帝法  
 典ニモ未タ嘗テ之ニ何タル答案決斷チ附セサルモノアリ故ニシヤス  
 チニアン帝ハ之カ決斷チ付スル爲メ五十條ノ裁決一卷チ發布セリ且  
 ツ紀元五百二十九年ニ發布セラレシ成典ハ極メテ不完全ナルカ故ニ

之ヲ修正校訂シテ此五十條裁決ヲ以テ之ニ附加シ法典ノ第二版ヲ發  
 布セシコトヲ企テトリボニア氏ヲシテ右修正ノ事業ヲ監督セシメ  
 紀元五百三十四年十二月其功全ク成リ之ヲリペテタプロレクシオン  
 ス法典ト稱シ法律タルノ効力ヲ與ヘタリ是レ即チ今日吾人ノ有スル  
 第二法典ニシテ前者即チ法典ト稱シ法律タルノ効力ヲ與ヘタリ紀元  
 五百二十九年發布ノ法典ハ全ク廢棄セラレ今日ニ在テハ一ノ存スル  
 モノナシ蓋シ紀元五百三十四年ノ法典ハ分ツテ十二卷トナシ類集法  
 典ト殆ント一様ナル方法ニ依テ編纂シタルモノナリ

追加法

第二十三節

追加法

ノベルス

此ノ如クニシテシヤスチニアン帝ハ法律ヲ配置整頓シ完全ナル法典  
 ナ編纂セシモ未タ以テ新法發布ヲ中止スルコトナク爲メニ該法典中  
 云ヘルアリ曰ク將來ニ於テ法制上改正ヲ要スル場合ニ於テハ必ラス

羅馬法沿革史

六十九

シヤスチ  
ニアノ法  
典ノ排列  
法

羅馬私法

新憲法ノ式ニ依テ發布セラレシト爾來紀元五百三十五年一月ヲ始  
トシ紀元五百六十四年十一月ヨ至ル迄續々巨多ク新條例ヲ發布シ其  
數百六十五卷ニ達シタリト雖モ一モシヤスチニアノ帝在世中ニ編纂  
シタルモノナキカ如シ其他紀元五百四十五年即チトリボニアノ  
死去セシ年ヨリ後ニ發シシ僅少ノ新條例アリ

### 第二十四節 シヤスチニアノ法典ノ排列法

抑々シヤスチニアノ法典ハ法律ノ性質區別及ヒ淵源ヨリ説キ起シ進  
テ人物死者ノ相續義務及ヒ訴訟手續ニ論及シタリ  
今次ニ羅馬私法ノ概畧ヲ序シ排列法ノ一斑ヲ窺ハシト欲スルナリ  
羅馬私法  
アウスチン氏ハ嘗テ其著書法理論附録ノ緒言ニ於テ法律ノ問題ヲ論  
スルニ當リ第一ニ普通法理即チ法律ノ各組織ニ關スル法律上ノ思想